

ニュースレター 三千里

Vol.07 2004年8月号



「ウリ民族大会」に参加して 三千里鐵道 理事長 都相太

“平和は語るものではない、実現するものだ”という、ある月刊誌の題目が眼に飛び込んできた。前駐レバノン特命全権大使天木直人氏の言葉だ。日本のイラク派兵に反対して外務省を退官した天木氏である。

6月14・15・16日と、仁川市で開催された“南北共同宣言四周年記念わが民族大会”に海外同胞の代表の一人として参加してきた。日本からは三千里鐵道のほか民団・総聯・韓統連・在日コリアン青年連合が招請を受け参加した。



もちろんというべきか、総聯は北側の海外代表としての参加である。ほかの4団体は南側の海外代表としてである。「もちろんというべきか」という表現は、総聯の代表たちは、日本から北京を経由してピョンヤンに入り、そこから仁川空港に到着し、東京から直接韓国に入る場合と比較して3倍から4倍の距離と時間を迂回してこの民族大会に参加したことをさしている。

この民族大会の主目的は統一である。

統一をめざすものなのだから総聯も直接堂々と韓国入りを果たせば良いのではないのか、と考えたのは私一人だけだろうか。もちろん北側の代表団の一員としてである。そうすれば確実に一つの壁が崩れたはずである。

“統一は語るものではない、実現させるものなのだ”

この民族大会に参加した実感である。民主主義を獲得した韓国市民は誇りと確信に満ちていた。それにゆとりさえ感じた。S K野球場を埋めた二万人の仁川市民の歓声の中で、私は淋しさと孤独に包まれていた。三千里鐵道は京義線の連結を推進しようとした。それも南北等距離に見すえて、非武装地帯四kmから出発した。朝鮮半島の平和と統一を願い、海外同胞としての役割と在日の再統合を願ったものであった。

今年十月には京義線を走る列車は非武装地帯を貫く予定である。

在日の力を結集して、在日の力によってこの四km区間の鉄路を完成させたかった。

民団も五人の代表団を仁川に派遣した。民団新聞には、この民族大会に関する報道は一行もなかった。私の見落としならば幸いだが、南北統一運動に積極的に関わり合う姿勢は見えていない。

民団および総聯を批判する場でないことは重々知りながらも分断と冷戦の中で生まれた両組織が根元的にかかえているDNAを指摘せざるを得ない。

もう一度言おう。“統一は語るものではない、実現させるものなのだ”

「統一は必ず実現する」 三千里鐵道 事務局長 韓基徳



去る6月14日から17日に、仁川で開催されたウリ民族大会には、南側から1200人余り、北側から103人、海外から57人の代表団が参加した。

統一は必ず実現する - しかも、大方の予想よりもずっと早く！

この大会における北側代表団とのいろいろな形での交流を通じて、この確信が生まれた。

正直、私にとっても、統一というのは少々気が遠くなるような話で、平和さえ実現できればとりあえず嬉しいし、分断された鉄道が連結し、経済や文化の

交流がどんどん活発になれば、いつの日か統一もやってくるのだろうぐらいの気持ちだった。彼らは間違いなく統一を熱望している。彼らは北がいかに貧しくとも富裕層に属しているに違いないのだが、その彼らから北の体制賛美やイデオロギーの匂いはほとんど感じられなかった。

彼らは南に対して大変な共感を持っていて、精神的な意味では、統一の“覚悟”ができていると感じられた。では南のほうはどうであるのか。

4月の選挙はまさに市民革命と呼ぶにふさわしいものであった。この選挙では分断時代を終わらせようとする若い人々が大挙当選した。彼らこそは、70年代80年代を通じて、青春と人生を民族にささげた

人々であった。

与党であるウリ党対ハンナラ党の対決で与党が勝利したというような、日本のマスコミの理解は完全に間違っている。分断時代の継続か、統一の大門を開くのかという選挙で、統一勢力が勝利した選挙だったのだ。しかも、与党も野党も統一勢力が実勢を握っている。9月には国家保安法の撤廃も確実な情勢というし、この流れはもう、後戻りできないのだ。

そう、南の人々も統一の“覚悟”ができていなのだ。

統一への道のりは、決まっていたいくつかの段階を確実にステップしながら最後のステップで統一されるなんていうものじゃあない。いくつかのステップを踏んでいるうちに、それこそ、その日は突然やってくるのだ。問題は、南北の人々が、その日を迎える“覚悟”があるか無いかということなのだ。そして、それは“ある”のだ。

初めて出会った北の人々は、まがいもなく同胞であった。私の中にある“分断意識”を思い知らされながらも、おずおずと会話を交わしたのだが、思いが詰まって何を話していいかもわからなかった。いわゆる“美女軍団”を前にして、いかにももったいないことであった。

今回のウリ民族大会には、在日から、総連、民団、韓統連、在日韓国青年同盟、在日コリアン青年連合そして三千里鐵道のそれぞれの代表が参加した。こんなことは、一緒に住んでいるこの日本の地でこれまで実現することは無かった。

祖国の分断状況に翻弄されて、在日も分断意識を深く刻んできたのだが、祖国の状況の変化に促されて在日の中でも統一機運が高まっていくことを念願している。

大会に参加した、とある団体の、とある方は、「祖国がどうであれ、在日は在日とし・・・」などと言っていたが、そんなのは絵空事としか思えない。

南の民主化闘争に背を向けてきた人（団体）が、祖国の情勢変化を素直に受け入れられずに、祖国からますます遠ざかっていく、そんな図式が透けて見える。

もう片方で、とある団体は果たして海外同胞の代表であったのかという疑問がある。彼らは自分の意識を完全に片方の祖国に同化していた。

実際、海外代表57人の中にはカウントされていなかった。

在日の“遅れ”は目を覆うばかりなのだ。



南北共同宣言4周年祝祭 記念講演報告



日時：2004年6月12日(土)午後18時～21時

場所：ウィルあいち（名古屋市）

講演：

高鎮和氏（ハンナラ等国会議員）

李華泳氏（ヨルリンウリ党国会議員）



李華泳氏

【講演ポイント】今回の総選の意味

国民が選んだ大統領を、党利党略により弾劾する勢力に対する国民の峻厳なる審判

地域色を克服した最初の選挙（嶺南地域において高い支持率でわが党の善戦）

執権党が力強く改革作業を推進するよとの国民からのメッセージ

放蕩国会、不正車輛問題、弾劾に象徴される過去の古い政治、旧態政治に対する倦厭の表出

金権選挙、組織選挙、亡国的な地域感情に対する審判



高鎮和氏

【講演ポイント】南北鉄道に関して

南と北を連結する鉄道の建設は、分断50年、断ち裂かれた南北により、井の中の蛙として生きてきた韓民族の生存条件を根本的に変化させるでしょう。

北側を経て中国と中央アジア、シベリアとヨーロッパ大陸へ続く道を開けば、南北ともに繁栄のための基礎を形成することになるでしょう。

大韓民国の青年たちは世界と呼吸し、世界を舞台に生き活動する、言葉どおりの世界人となることでしょう。

南北共同宣言4周年祝祭記念講演には、約100名ちかくの参加があり、韓国国会議員の貴重な講演を聞くことができました。

ホームページでは、両国会議員の講演概要をさらに詳しく掲載していますので、是非ホームページにて講演内容をご確認して頂けたら幸いです。



7月20日午前、京畿道坡州市（キョンギド・パジュシ）にある都羅山（ドラサン）駅前の道路。北朝鮮に支援する国産コメ10万トンが、史上初めて陸路で移送された。南北出入事務所を出発した「大韓通運」所属の25トントラック40台が、非武装地帯を通過している。トラックは京義線（キョンウィソン）道路に沿って開城（ケソン）に到着し、1000トンのコメを北側に送って戻ってきた。陸路コメ支援は10月中旬まで京義線・東海（トンヘ）線道路を通じて行われ、延べ4000台のトラックが動員される。（中央日報より）



第11回ASEAN地域フォーラムに出席中の潘基文（パン・ギムン）外交通商部長官と白南淳（ペク・ナムスン）外相は1日、ジャカルタ市内のJWマリオットホテルで史上2度目の外相会談を行い、共同記者発表文を採択した。以下は共同記者発表文。

「大韓民国 潘基文外交通商部長官と朝鮮民主主義人民共和国 白南淳（ペク・ナムスン）外務相は2004年7月1日にジャカルタで会い、相互関心事に対し意見を交換した。

本日の会談で双方は2000年6月に歴史的な平壤（ピョンヤン）南北首脳会談と6・15共同宣言が南と北が和解協力、平和統一を実現するための基本であることを再確認した。

双方は2000年6月に南北共同宣言の精神に立脚し協力と交流を活性化する必要性について認識を共にした。これと関連し、双方は関係発展のため国際連合、ASEAN 地域フォーラムなど国際舞台で引き続き相互協力していくことにした。

双方は6カ国協議を通じた核問題の平和的解決が韓半島の安全だけでなく南北関係の発展にも肯定的に寄与するという意見を同じくした」（朝鮮日報より）

編集後記

今まで年に1回のニュースレターが、今年は2回目（驚）！ホームページもなんとかリニューアルでき、少しはスッキリ見やすくなったと思います。鉄道・南北関係のニュースも日々追加更新していますので、是非とも毎日チェックしてください～い！

非武装地帯縦断第2幕 金剛山ツアーも秋（別紙参照）に予定していますので、多くの方のご参加をお待ちしております！

（ゆなっば）



海外同胞と、平和統一を願う世界の人々と手を結んで……

NPO法人 三千里鐵道

Tel: 0532 - 53 - 6999 Fax: 0532 - 54 - 4931

Web: <http://www.sanzenri.gr.jp/>